

生き生きとした国語教室の創造

—— マンガを用いた漢文学習・『史記』項羽本紀の授業実践 ——

山本 徳子

平成十七年十二月の山口大学国文「研究懇話会」において、お話しさせていただきました内容について、少し書かせていただきます。

これは、現在勤務している工業高校に於いて、平成十六年度の二学期に三年生（旧課程「国語Ⅱ」）対象に行った実践です。

①授業実践のきっかけ

旧課程の「国語Ⅱ」の教科書に採用されていた「史記」項羽本紀の「鴻門の会」や「四面楚歌」「項羽の最期」は、歴史書でありながら、文学作品としての読みにも耐えうるものであり、項羽や劉邦はじめ様々な登場人物を通して、人としての生き方を考える上で優れた教材です。しかし、漢文の学習は言語の問題による生徒の抵抗感が大きく、その上、二単位しかない三年生の授業でこの長編の漢文を学習するにはかなりの覚悟と工夫が必要でした。ある時、生徒が教室で熱心にマンガ本を読んでいる姿を見て、抵抗感の強い漢文の学習に、生徒にとって身近なマンガを利用することはできないかと考えました。

マンガを導入する方法としては、次の三つが考えられます。

1 文学作品をマンガ化する（活字→マンガ）

2 マンガをもとに感想文や小論文を書く（マンガ⇩活字）
3 マンガ化された古典作品などを補助教材として用いる
（マンガ⇩活字）

今回は、3のマンガを補助教材として利用しながら、グループ学習や資料作成・発表会等を取り入れて、自己有用感に乏しい生徒達が成就感や達成感をより感じられる授業の構築を目指しました。

教材として、教科書『史記』項羽本紀「鴻門の会」「四面楚歌」「項羽の最期」・横山光輝作『若き獅子たち 項羽と劉邦』の主に、六巻「鴻門の会」二二巻「四面楚歌」を使用しています。

②授業展開「指導のポイント」因は恩師世澤博昭先生考案を基にしたもの



今回は個別教材として、「鴻門の会」から「四面楚歌」「項羽の最期」までを八つのグループに分け、それぞれ担当する場面について、内容や人物の心情等を資料を作成して発表するという方法を採用しました。詳細は以下の通り。

〈導入〉(一斉授業)

1 本文の「鴻門の会」に至るまでの経緯を理解する。

2 「鴻門の会」から「項羽の最期」までを場面ごとに区切り、

グループごとに担当を決める。(二班五名程度)

「各班が正確にわかりやすく説明しないと全体の流れが把握できないことをしっかりと自覚させる」

〈基本学習〉(共通教材による一斉授業)

3 書き下し文の練習・資料作成の方法を理解する。

「鴻門の会」の冒頭部分を用いて、書き下ししの練習・発表資料のサンプルを提示し、資料作成の約束事を説明する」

〈発展学習Ⅰ〉(個別教材によるグループ学習)

4 担当場面を書き下し文に改め、本文を読む。

「書き下し文・読みを確認する」

5 マンガを利用してあらすじを把握し、本文の内容を理解する。

「マンガと本文の内容を比較させる」

6 その場面のポイントを押さえる。

「内容やポイントについて、確認する」

7 発表資料を作成する。

「わかりやすい資料作りの工夫を促す・サブタイトル」

〈発展学習Ⅱ〉(一斉授業)

8 発表・評価をする。

「二班十分以内 他の班の評価・自己評価をさせる 他の班の評価は必ず良かった点を見つけるよう指示する」

9 各班の作成した資料をもとに、全体の流れを把握する。

「内容確認プリントで正確に把握させる」

〈まとめ〉

10 登場人物を一人選び、その人物の生き方について考える。

③目標

a 学習目標

1 時代背景、「鴻門の会」に至るまでの経緯を理解する。

2 自分達が担当する場面を、マンガと本文を使ってよく理解し、内容に合うサブタイトルをつけて、正確でわかりやすい資料を作成する。

3 わかりやすく発表する。

4 他の班の発表をよく聞き、評価すると同時に、全体の流れを把握する。

5 登場人物の心の動きや生き方について考える。

b 指導目標(1~4は言語能力・技術目標)

1 漢文を自らの力で読解する。(読む力・調べる力)

2 内容・ポイントをわかりやすく資料にまとめる。(書く力・要約力)

3 わかりやすく発表する。(話す力・表現力)

4 他の班の発表を聴き、評価する。(聞く力・コメント力)

5 登場人物の心の動きや生き方に触れることにより、自らのものの方、感じ方、考え方を深め、豊かにする。(価値目標)

6 グループで作業することで、協力してひとつのものを創り上げ

ていく喜びや達成感を得る。

目標を a 学習目標と b 指導目標に分けているのは、偉大な教育者であった大村はま先生の基本理念に基づいています。

【目標の二重構造】

大村はま先生の掲げる指導の基本理念

「指示や命令の形をとらないで、教えたいことを自然に学習者にさせてしまふ」

学習者はあくまでも学習課題の解決を図ることが目標（学習目標）であり、指導者は学習者が課題を解決するために必然的に展開する言語活動の中で読む・書く・話す・聞く力といった言語能力や自ら学ぶ力などを身につけさせることを目標（指導目標）とする。【このように学習者と指導者の目標を分けて設定することを大学時代の恩師である世羅博昭先生は「目標の二重構造」と名付けられました】

④考察

(1) マンガの有効性

マンガを用いるという点がこの実践の大きなポイントですが、確かにマンガは生徒と漢文教材との心理的距離を縮めることにおいて、非常に効果的であったと思われれます。「今回はマンガを使って漢文の授業をする」と言った途端に教室の熱気が上がりました。また、自分達が担当する場面を理解する際に、どうしても前後の内容把握が必要になってくるのですが、その際、マンガであれば比較的容易に流れを把握することができるため、長編をぶつ切りにする今回のような学習方法においては非常に有効であったように思います。

しかし、マンガを読むことが目的ではなく、マンガはあくまでも補助的なものとして生徒を漢文の世界へと導いていかなければなり

ません。そこで、本文の内容を基本にすること、また漢文特有のリズムや雰囲気味わわせるために、本文の音読を随所に取り入れられた。

(2) 主体的な取り組み

生徒はマンガで大筋の内容を理解すると、次に本文である漢文に向かい、マンガの内容と本文とを対応させながら、その中で疑問を持った言葉などを自ら進んで調べていました。そうやって主体的に、積極的に、そして楽しそうに漢文の世界へと入っていくことができたようです。生徒が登場人物の心情にまで思いを馳せていくことができたようです。また、資料の作成においても、マンガの切り抜きを上手に利用したり、自分達で絵を描いてみたり、わかりやすい資料を作ろうと、色々工夫をしていました。発表も、人前で話すことが苦手な生徒が多い中、書き下し文をセリフ分けして劇化したりするなど、楽しみながらも真剣に取り組む姿が見られました。

(3) 達成感

マンガを使うということで一旦は盛り上がった教室の空気も、実は資料作成と発表のことを告げると、「めんどくさい」「そんなの無理だ」と一気に消極的な空気に変わっていききました。図書室での作業も初めの頃はなかなか進みませんでした。次第に積極的に取り組むようになり、時間が足りないからと、昼休みや放課後まで使って、資料作成をする生徒や、市立図書館に行ったりする生徒も多く見られました。

授業後の感想には「もっと工夫すればよかった」「もっとみんなで協力すればよかった」という反省もありましたが、「自分がここまでできるとは思わなかった」「そんなの無理だ」と思っていたけど、

結構いいものができてうれい。」というような感想も多く聞かれ、この実践によってわずかでも成就感、達成感を得てくれたことがなにより喜びでした。

また、内容の理解においても、グループによる偏りはあるものの、従来の一斉授業の時よりも高い理解が認められました。

⑤今後の課題

この実践において、重要なのは教師の関わり方です。正確に内容を理解させるためには、その場面のポイントは何か、どの表現を押しさえる必要があるのかなど、それぞれのグループに適切に指導を行いながら、生徒の主体性を損なわず、自分達の力で成し遂げたと実感できるような指導援助が必要となってきます。また、クラスによって取り組みに差があり、全体的に内容が薄く、登場人物の心情にまで発展させることが難しいクラスもありました。生徒の実情に応じた、より一層きめ細やかな指導の工夫が必要になってきます。

さらに、グループ学習を取り入れる為、グループの構成の仕方やグループ内の活動量の差による不平不満など、指導者が配慮すべき点は多々あります。大切なのは、目の前の生徒をしっかり見つめ、実態に適應した指導を常に考えていくことだと思っています。

以上のような授業実践のお話をさせていただきましたが、「思いつき」で行った私のこの拙い実践に対し、多くの先生方や学生の皆さんが貴重な御質問や御助言をくださいました。高校教員だけの研究会では出ることの少ない、教材自体に対して鋭く切り込んだ御意見もあり、自分の浅薄な教材研究を反省するとともに、今後発展させる道標をいただいたようで、大変ありがたく思っております。こ

のような機会を与えてくださった林先生をはじめ、人文学部の先生方に感謝致します。

最後に、懇話会でもお話致しましたが、私が大学生時代に出会い、教師の在り方として大変感銘を受けたお話を紹介させていただきます。これは、大村はま先生が昭和十年代、八潮高等学校に勤めていた頃、奥田生造という先生から聞かれた話だそうです。

「仏様の指」

「仏様がある時、道ばたに立っていらつしゃると、一人の男が荷物をいっばい積んだ車を引いて通りかかった。そこは大変なぬかるみであった。車はそのぬかるみにはまってしまつて、男は懸命に引くけれども車は動かこうともしない。男は汗びつしよりになって苦しんでいる。いつまでたつてもどうしても車は抜けなない。その時、仏様はしばらく男の様子を見ていらつしゃつたが、ちよいと指でその車にお触れになつた。その瞬間、車はすつとぬかるみから抜けて、からからと男は引いていつてしまつた。

男はみ仏の指の力にあずかつたことを永遠に知らない。自分が努力してついに引き得たという自信と喜びとで、その車を引いていったのだ。」『教えるということ』大村はま著 共文社 一九七三年

(やまもと・のりこ)